かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

福芦分教会
昭和10年12月3日　御鎮座奉告祭

陽気ぐらしを目指して、たすけの輪を広げよう
今一手一つに、一歩一歩！
＊初席者一名以上
＊百万件のにをいがけ

創立百三十周年記念祭並六代会長就任奉告祭
立教184年(2021年)10月24日 執行

立教182年
2月号

大教会長様おはなし

スローガンに込める思い

1・20年頭会議において

立教182年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。

大教会長様は、記念祭に向かう三年千日活動に入った年頭に当たり、昨年の大災害、また、真柱様のご身上という節から、本教の本旨である陽気ぐらしの真義を問い直し、たすけ心の発揚と実践を促される親心として、スローガンに込められた思いを述べられた。その後、講堂で会食がもたれた。あいさつの要旨は次の通り。

年が明け、立教182年を迎えました。今年から立教184年10月24日の「創立130周年記念祭並六代会長就任奉告祭」に向かって、三年千日と仕切っての成人の歩みを進めます。

ホップ・ステップ・ジャンプと3段階で大きくジャンプを進めていくために

三年千日の歩み方を話される大教会長様

は、第1歩目のホップが上手く踏み出せるかどうかが、大きな関わりを持ってきますが、その歩み出しの本年1年は、いつにも増して、しっかりと勇んで、成人の歩みを進めたいと思います。

「陽気ぐらしを目指し、たすけの輪を広げよう」というスローガンを掲げ、1年目の活動目標として「初席者一名以上」・「百万件のにをいがけ」を打ち出し、「今一手一つに、一歩一歩！」という心で、この実践項目を進めることとなりました。

▼大災害を通して

「陽気ぐらしを目指し…」というスローガンですが、実は、昨年、起こった出来事から、あらためて、陽気ぐらしとは何かを考え、それを目指して歩んでいく時期が、今、来ていると考えて、これを決めました。

昨年一年間は、「災」という文字が一年の文字となったように、「ぢしんをふかぜ水つき」だけではなく、耳慣れない言葉で表現するような暑さに対処するような夏を経験し、災害に大変苦しんだ一年でした。

かみなりもぢしんをふかぜ水つきも
これわ月日のざねんりいふく　八・58

とは仰せられますが、この災害は、神様の言うことを聞かない人間の姿を見て、神様が私たちを懲らしめてやろう、苦しめてやろうと現わしたものではありません。

私たちは、かしもの・かりものと教えられますが、心一つが我がの理で、その心の理に、陽気ぐらしができるように体をお借りしています。その貸された体が、より陽気ぐらしができるようにと、天然自然のお働きをもって、親神様が働かれています。

順序からすれば、心の理があって、かしもの・かりものがあり、より良く陽気ぐらしが出来るようにと天然自然のお働きがあるのですから、そうして災害が起こるのも、すべて、私たちの心の理が現われた姿、私たちの心通りのご守護です。

ただ、親神様は、大難は小難に、小難は無難にと、常に導かれていますから、この災害も、大難は小難に導かれた姿ですが、親神様が親心をもって、小難に導かれているのにも関わらず、今まで経験したことのないような大きな災害が起こった。――もし、小難に導かれていなかったら、もっと大勢の犠牲者が出たことでしょう。

私たちの心の理が、親神様が小難に導ききれないような姿＝大災害に現われたと考えると、「人災」とも言えます。

そうして考えると、私たちがよほど心を入れ替えていかねばならない、切羽詰まった時期が、今、もうきていると言えないでしょうか。――一時は非核化を目指した世界も、今や、だんだんと核や兵器の開発に向いた世界情勢です。

あらためて、私たちの心一つひとつの理を、しっかりと、陽気ぐらしに向かう心に立て替えていかねばならない、そういう時期がもう来ているということです。

▼陽気ぐらしとは

そのうえで、陽気ぐらしとは何かを、あらためて、思案せねばなりません。

親神様は、教祖を月日のやしろとなされて、人間を創めたのは陽気ぐらしを見たいからだと教えられました。私たちは、陽気ぐらしをするために生まれてきたということです。世界一れつをたすけたいと、この世に現われたその思いは、陽気ぐらしに立て替えてやりたいということです。

真柱様も、大亮様も、事あるごとに「陽気ぐらしを目指して」と話されますが、陽気ぐらしとは一体、何でしょうか。

おふでさきには、

そのゝちハやまずしなすによハらすに
心したいにいつまでもいよ　四・37

とありますが、病気することなく、死ぬこともなく、体が弱ることなく、115歳まで、願えば、115歳以上も弱らずに生かしてやりたい。――そういう姿こそが陽気ぐらしの姿だと、私たちはつい思っているでしょうが、陽気ぐらしとは、人間お互いが、一れつきょうだいとして、扶け合って明るく陽気に暮らす状とも教えられています。

明るく楽しく陽気に暮らすためには、扶け合うことこそが大切で、「扶け合うこと」こそが、陽気ぐらしの姿だと、私たちは心に留めおかねばなりません。その、目指すべき陽気ぐらしを実現するためには、世界中の人間が「扶け合うこと」を目指さねばならないということです。

病気や事情をなくすことではなく、扶け合うことです。

▼真柱様のご身上から

昨年6月7日、真柱様がお倒れになり、それにより、おさづけの理を戴けなくなりました。つまり、それ以降、おさづけの理拝戴者が一人もいない、新しいよふぼくが生まれていないということです。

明治20年、教祖が御身をお隠しになって世界だすけに踏み均しに出られた、その意味は、つとめの急き込みであり、おさづけの理を渡すためでした。――陽気ぐらしを実現するためには、おつとめが大事であり、おさづけを取り次ぐことが大事だと、明治20年に示された。――その大切な角目のおつとめはつとめられても、肝心要のたすけの理であるおさづけの理が戴けないということは、正しく、私たちは、陽気ぐらしに向かっての歩みができないことに外なりません。

これは由々しき問題です。

▼人づくりの目的は

陽気ぐらしに向かうために大事なことは、私たちの心一つ、動き一つであって、政治や経済や教育ではありません。

そのためには、「おさづけの理が戴けない」という事態から、しっかり思案し、反省せねばなりません。

毎年、心定めをしていますが、「初席者が何名出来た。良かった」、「修養科生が、心定め通り出来て良かった。」、「今年は足りなかった。」と、数に一喜一憂していないでしょうか。

何のために、別席を運び、おさづけの理を戴き、修養科に行くのか。――別席は、同じ話しを9度聞く中に、我身たすかりたいの心から人たすけたいという心に切り替わってくる。その替わった心におさづけの理を拝戴する。

私たちは、その心の切り替えを、別席のお話しだけに任せきっていないでしょうか。1席ごとにたすけ心に切り替わるように、別席者に声を掛け働き掛け、私たち一人ひとりが理づくりし、心が切り替わるように丹誠してきたでしょうか。何も丹誠せずに、おさづけの理を戴いたことに満足してしまって、おさづけを取り次げるまで育ててきたでしょうか。

修養科に行くのも「行ったらたすかるから」とお誘いはしますが、3ヶ月でおさづけの理を戴く、つまり、人をたすける心になるからこそたすかるのであって、身上がたすかるために修養科に行くのではなかったはずです。初代の頃は、修養科を卒えたら、皆、おたすけ人に育ち、おたすけに走り回りました。

今、私たちが、果たして、どれだけ、おたすけ人を育てているでしょうか。

私もありがたいことに、これだけ元気になりましたが、長時間のお話しや神名流しはできません。しかし、お話しもおさづけもお取り次ぎできるし、お願いづとめも、また、やっと、十二下りもできるようになりました。こんな私でも、おたすけはできます。

身上があっても、事情であっても、おたすけができるからこそ、陽気ぐらしの世界に立て替えることができるのではありませんか。

扶け合う姿こそが、陽気ぐらしの姿

だとするなら、身上・事情があっても、私たちは陽気ぐらしを目指すことができるのです。

こうして考えれば、「おさづけの理を戴けない」という事態は、「何のためにおさづけの理を戴くのか」＝「人をたすけるための道具立て」だということをよく考えてみよとの急き込みではなかったかと思います。

病気をよくすること、良くなることがおたすけだと思って、それが目的になっていないでしょうか。それを通して、人をたすける心になってもらい、人だすけする人になってもらうことこそが、本当のおたすけです。

▼三年千日の歩み出しに当たって

記念祭を迎えますが、130年の経年を喜ぶのが目的ではなく、白紙に戻って、その歩みを振り返るためのものです。

笠岡の元一日を考えれば、一人から始まったこの道ですが、さとさんは、おさづけの理を戴いていなく、御供さんとお願いづとめでおたすけしました。

どうでもたすかってもらいたいとの気持ちを、一生懸命、人にぶつけて行く中で、たすけられた人々が、かしもの・かりものの理をしっかり心に収め、たすけられた人がおたすけするようになった。そしてまた、そのたすけられた人がおたすけするようになって、おたすけの輪が、どんどん広がって行ったからこそ、この130年という笠岡の道に繋がってきました。

私たちの使命は、おたすけすることによって、たすけの輪を広げることです。おたすけは、そのきっかけです。

先人たちの歩みの中でも、よく聞かされます。「何日も何日も、おたすけに通った挙げ句に亡くなってしまった。お詫びを兼ねてお葬式に行った。家人に怒られると思ったら、御礼を言われた。『本来なら苦しんで出直すところを、うれしい、ありがたいと、喜び一杯で出直してくれた。』と喜ばれた。『これからは、私たちが信仰します。』と。――おたすけ先の本人にはたすかってもらえなかったが、その理によって、その人の心がたすかり、そして、その関わる人々の心がたすかった。

おたすけ熱心な、一人ひとりの一条心が人に移って、たすけの輪が広がっていったのが、初代からの代々の道の通り方ではなかったでしょうか。

あらためて、この旬に、私たちは思案せねばならないし、そして、今、世界は、正しくそれを求めています。

そのことに、私たちよふぼくが、気付かねば、いつまで経っても陽気ぐらしは絵空事であり、絵に描いた餅です。ただ、唱えるだけ。それでは意味がありません。

しっかりしろ！

おたすけ人を育てること、たすけ心を移していくことが目的で、よふぼくとして、そのことをしっかりと心において、三年千日を通りきりたい。

「陽気ぐらしを目指し、たすけの輪を広げよう。」――これには、大変な思いがあることを、しっかり、皆さん方には、心においていただきたい。

▼「初席者一名以上」

1年目の実践項目は「初席者一名以上」ですが、「一教会」が括弧に入ります。

笠岡全体で、大教会を入れても138ヶ所ですが、昨年は、初席者が教会数もいきませんでした。その現状から考えれば、「1教会、初席者1名以上」というのが、現実の姿です。

しかし、それをそのまま受け取るのか、「よふぼくが、初席者1名以上」と考えるかは、皆さん方の心一つです。それぐらい心がなかったなら、陽気ぐらしの実現を早めることなどできません。

よふぼくが数名しかいない教会ならともかく、何十人もいるのに「1教会、初席者1名以上」でいいのか。「よふぼくが初席者1名以上」を目指さなくて、何が「陽気ぐらしを目指して」か、ということです。

どうぞ、教会長・布教所長の皆さん方は、しっかりと、その点を心におきましょう。

▼「百万件のにをいがけ」

「百万件のにをいがけ」は、「軒」ではなくて「件」です。1年を掛けて、「百万件」のにをいを掛けていこう。これは、たすけ心を使って、それを行動に表わした件数です。

内容は何でもいい。――パンフレットを持ってにをいがけ・おたすけした件数でもよいし、困っている人に一声掛けるだけでも1件です。気持ちよく公園を使ってもらおうとゴミを拾うのも1件。しんどそうな仕事仲間に休むよう促すのも1件。――何でもいい

から、たすける心を持って行動に現わせば、それが1件です。誰でもできるでしょう。

それを百万件、にをいがけしましょう。この目的は、正しく、「たすけ心を使い、それを行ないに現わすこと」です。よふぼく・信者の皆さん方に、しっかり声を掛け、1回でも多くたすけ心を使いましょう、おたすけしましょう、行動に現わしましょう。

▼「お願いづとめ」のススメ

昨年暮れ、医者からたすからないと言われた人にたすかったもらいたいと、一人でも多くの人に声を掛けて、総立ちで十二下りのお願いづとめをしました。おかげで、命をたすけられ、元気になりました。――集まった人の数だけが件数です。皆、たすけ心を使っておつとめをしましたので、10人集まれば10件、50人なら50件。

私は、全部の教会で、みんなに声を掛けて、この「お願いづとめ」をしましょうと提唱したい。

一番、出来やすいおたすけの体験は、お願いづとめです。これは、おさづけの理を戴いてなくてもいいから、小さな子供でも、おつとめさえできれば、だれにでもできます。身上などでおてふりが出来ねば、唱和だけでも1件です。

そうして、一人でも多くの人、よふぼく・信者におたすけを体験してもらいたい。

ただ、単にお願いづとめしただけでは意味がありません。お願いづとめをするのが目的ではなくて、おたすけを体験してもらうのが目的ですから、おたすけ先を探さねばなりません。

教会を挙げて、何とかたすかってもらいたい人を捜して、そうして、皆でお願いづとめをすれば、正しく、おたすけを体験できる、大きな力になると思います。

どうでも、このお願いづとめを、それぞれの教会でしていただきたい。ただし、会長1人とか、教会の家族だけではなく、より多くの人に声を掛けて、一緒にお願いづとめをする。――そうして、一緒にお願いづとめした皆に、「おかげでご守護いただいた」と連絡すれば、一つの喜びが大勢の人の喜びに繋がり、たすけの体験に繋がってくるのではないでしょうか。

初代が、御供さんとお願いづとめでご守護いただいてきた道があるのです。どうぞ、この「お願いづとめ」も合わせて提唱しますので、それぞれの教会で進んでしましょう。

「陽気ぐらしを目指し、たすけの輪を広げよう。」、活動目標は「初席者一名以上」・「百万件のにをいがけ」です。

「今一手一つに、一歩一歩！」確実に、成人の歩み、前進しましょう。

《以上要約》

春季大祭講話

銘々が、持ち場を自覚し実のある三年にしよう

世話人　島村廣義先生

立教182年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら多数の参拝のもと執り行われた。

ご参拝くだされた世話人・島村廣義先生は、記念祭に向け三年千日活動に入った私たちに対して、記念祭・奉告祭をつとめる意義と、それぞれの持ち場・立場でなすべきことと、その心構えを、具体的にお話しくだされた。要旨は次の通り。

立教182年の新しい年を迎えました。

笠岡大教会にとっても、いよいよ、立教185年10月24日には、真柱様お入り込みで創立130周年記念祭、それに合わせて、六代会長就任奉告祭をつとめられるので、今年より、それに向かっての三年千日活動を進められます。

皆様方は、心を引き締め、心新たに、その活動を進めていくうえでの心作りをされていることと思いますが、そういうえから、いろいろとお話しします。

▼大祭をつとめるごとに心すべきこと

春の大祭をつとめる意味を、あらためて、考えてみると、おさしづに、

さあくこれまで何よの事も皆説いてあるで。もう、どうこうせいとは言わんで。四十九年前よりの道の事、いかなる道も通りたであろう。分かりたるであろう。救かりたるもあろう。一時思やんくする者無い。遠い近いも皆引き寄せてある。事情も分からん。もう、どうせいこうせいのさしづはしない。銘々心次第。もう何もさしづはしないで。

（明20・1・10）

というお言葉があります。

これは、明治20年、教祖がお休みになっているお居間の次の間で、親神様の思召を伺ったことに対して、本席様を通して下がったおさしづです。

「四十九年前」とは、立教の元一日の親神様のお言葉ですが、「これまで何よの事も皆説いてある」と仰るのは、立教以来、ずっと、教祖が説き明かされ、私たちに教えられたこと。――世の中を、親神様の待ち望まれる陽気ぐらしの世の状に立て替えるために教えられるおつとめの勤修――このおつとめを教え通りにつとめることを急き込まれた、その一環としてのおさしづです。

記念祭の迎え方をお仕込みくださる
世話人・島村廣義先生

おつとめは、人間を創造されたときの親神様のお働きの理をつとめの理に表して、世の中を、親神様の望まれる陽気ぐらしの世界に立て替えるための、よろづたすけのおつとめです。

そのおつとめを教え通りにつとめるよう、教祖は急き込まれましたが、初代真柱様を芯に先人の先生方は、教祖の仰せを十分に承知しながらも、おつとめをつとめると、官憲の迫害・干渉、教祖に、直接、御苦労が掛かるということが差し迫っていたので、なかなか、教祖の仰せ通りにおつとめをつとめることに踏み切れなかった。

そして、初代真柱様を芯に、「神様の仰せと、国の掟と、両方の道の立つよう」にとおさしづを仰がれたときに、

さあく月日がありてこの世界あり、世界ありてそれくあり、それくありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。

というお言葉が下がります。

「神様の仰せと、国の掟と、両方の道の立つよう」にという考え方・発想は、すでに、人間としての考え方＝人間思案からの考え方で、親神様＝この世を創られ、この世を守護される神様の思召は、そうした人間思案のレベルで考えることではない。親神様の思召に沿いきって、神一条の精神で、教え通りにおつとめをつとめるようにと、厳しく仕込まれました。

神様とのやり取りの中で、教会本部の設立を願い出られ、おつとめをつとめるという心定めのうえに、それが許されました。

あくまでも、教え通りにおつとめをつとめる。教祖が50年掛かって、私たちに教えられたおつとめを、教え通りに神一条に立ちきってつとめることを、一連のおさしづで、厳しく急き込まれました。

正月からお姿を隠されるまでの49日間の、親神様とのこのやり取りは、教祖50年のひながたを凝縮したものであり、教祖のひながたの集大成が、この49日間の言葉の中に籠められています。

本教の立教の思召は「世界一れつをたすけるために天降った。」でしたが、教祖がお姿を隠されるときには、

子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。

（明20・2・18）

と仰った。おさしづに、

二十六日というは、始めた理と治まりた理と、理は一つである。（中略）二十六日は夜に出て昼に治まりた理。　（明29・2・29）

とあるように、そのをやの思いは、すべて「子供可愛い」・「世界一れつをたすけあげたい」という親神様の思召です。

私たちは、春の大祭をつとめるごと、親神様の思召、教祖の親心をしっかり受け止め、それにお応えする道を、しっかり通らねばなりません。

真柱様は、教祖のひながたの道こそ「律」であって、親神様が人間を創められた最初の思召、すなわち、「人間の陽気ぐらしをするのを見てともに楽しみたい」と思われて人間を創られた、その思召に適うよう、親神様のご守護を戴いて、教祖のひながたに道を求めて、その道を辿ることが大切だと諭されています。

▼年祭（記念祭）をつとめるごとに心すべきこと

さて、教祖の130年祭をつとめて、すでに3年が経過し、年祭後の歩みとして、「人を育てる」ということ、たすけ一条の神様の御用、陽気ぐらしの世

界建設に向かって、その御用をつとめる人をご守護いただくことを、特に強調して仕込まれています。

その中に、昨年・一昨年と、いろいろと節を見せられ、厳しいお仕込みを頂戴していますが、「かんろだいの節」の後の大祭で、真柱様は「一手一つ」ということを強調して、人材育成のうえにつとめることを促されています。

かんろだいの節、また、昨年は、真柱様のご身上、そして、道のうえだけではなく、天変地変など、世上のうえにもいろいろと大きな節を見せられて仕込まれました。

この節を生き節として芽の出るご守護を頂戴せねばと思いますが、ちょうど、この笠岡も記念祭なり会長を引き継ぐ就任奉告祭をお迎えになることも、理のうえでの大きな節です。

教祖100年祭をつとめ了え、次の110年祭を迎えるその前に、当時の真柱様＝前真柱様から、本部員・直属教会長に、教祖の年祭を、これからつとめるべきか否か、お問い掛けがありました。

100年までつとめたのだから、次は200年というような旬で考えるのか？惰性に流れて十年一節ごとに年祭をつとめていないか？――大教会にしてみれば、十年一節ごとに記念祭をつとめるのも、「そういう巡り合わせが来たから記念祭をつとめるのか？」ということでしょう。

このときに、本部員も直属教会長も、それぞれ、自分の心の内――皆、年祭をおつとめいただきたいという思い――を文書に認（したた）めて真柱様に提出しました。それをご覧になって、いろいろと思案されたことでしょうが、結論として、「つとめる」ということで思召され、同じ成人をするにも、仕切りを設け、目先に一つの目標を定めて通るのが、一番、成人しやすく、また、皆も動いて一手一つになることを思うと、こういう節目をもって、それぞれ、心を合わせることが大事だと諭されました。

1人でいくら頑張っても、1人のできることは1人のことだが、大勢で合力すると、1人では味わえない、大きな一つの動きをご守護いただけるとして、合力することの大切さ、一手一つになることの大切さを、あらためて、仕込まれました。

「記念祭」をつとめることも、私は、そうだと思います。

記念祭は、それぞれが、元一日に立ち返る、初代の方々が教会名称設立を願われた、その思いに立ち返るということ。そして、その思いが、今日の私たちにも、変わることなく受け継がれているかどうかを、お互いに、確認しながら、さらに前進して、成人の姿をご守護いただくように、皆が合力してつとめることが、記念祭をつとめることの意味だと思います。

▼次代を担う心構え

10年を一区切りとして、大教会も、成人の道を歩みますが、その機会に、会長の理もバトンタッチするということです。

私は、前任者＝義父（ちち）が身上中で、1年4ヶ月ほど代務者としてつとめ、前任者が出直してから、高知の会長の理を引き継ぎましたが、「末代」と教えられる理を受け継ぐのに、後任者に、確かにバトンタッチしたと言えることは、本当に幸せなこと、ありがたいことです。

また、後を受ける者は、（前任者が）元気な間は、まだ心許（もと）ない自分の会長としての歩み方を相談できるし、いろいろと教えを乞うこともできるわけで、そうして、その理が受け継がれていくのでしょう。

「もう何もさしづはしないで。」とのお言葉通り、すでに、50年に亘って、手本雛形を示されている、それを、一つの規範・ものさしとして、教祖のひながたに照らし合わせて、自分、自らが、しっかり道を求めて通る、自分の熱意で、積極的に道を進める姿を、神様は求められているように思います。

大教会でも、活動方針に「陽気ぐらしを目指して、たすけの輪を広げよう！」と謳（うた）われ、具体的な活動目標も掲げていますが、押し付けられてするのではなく、（笠岡に繋がる皆が）自ら、これを求めて、この活動を進めていただきたい。

青年会長様は、昨年の100周年総会のときに「楽しむ」ということを仰いました。「自主性」と「楽しむ」、そして、何よりもあらきとうりょうとして荒道を開拓する「世界たすけ」という3つの柱を掲げて鼓舞されましたが、「頑張れ、頑張れ」ではなく、「楽しめ、楽しめ」と仰います。

人から言われてするのではなく、自ら道を求めて、たすけ一条の道を楽しんで通ることが大切です。

▼後身を育てる心構え

今、130年祭以後は、後継者・人材の育成ということで、若い人に成人してもらうように丹誠することを促されています。

サントリーの創業者・鳥井信治郎氏の伝記に次のように書かれています。

鳥井氏は、松下幸之助氏にも大きな影響を与えた人、大阪の薬の町・道修町（どしょうまち）で薬を商なう店の次男坊で、同じ道修町の小西儀助商店に丁稚奉公に出され、その主人から仕込まれた話。

奉公とは仕事を覚えること。仕事を覚えるのは店のためだが、自分のためでもある。だから奉公は厳しく、辛いことがなければ何一つ身に付かない。店の事情によって、奉公はまちまちだが、儀助氏は鳥井氏より若いときに奉公に出、よくど突かれ、何遍も家に戻ろうと思った。3年間、温かい飯を喰わしてもらえなかったが、帰るところがなかったから、それを辛いと思ったことはなく、飯を食べさせてもらって、仕事も覚えられるだけで十分だった。ど突かれようが蹴られようが、倒れるわけにはいかず、この手にお金を握らせてもらえなかった。それが良かった。

やっと、得意先へ配達ができるようになってからのこと、得意先に行くのに、川がいっぱいあったが、渡しの船賃を出してくれなかった。それは、いけずではなく、船賃を出せば商いの利がならん。利がならん仕事は商いではない。それを覚えるのが商いの修行だ。少し遠回りすれば、川を渡れる浅い浅瀬があるのを主人も番頭も知っているが、儀助氏は、その日の午前中、薬を配る段取りを間違え、手間取った分だけ急いで判断を誤った。水かさが増した川を無理して渡ったら、一気に流され、流木に挟まれて、背中の傷が出来た。命が救かっただけでなく、この傷は、商人としての大きなものを教えてくれた。

身をもって苦労しないと、「ほんまもん」になれないという商人の精神を、丁稚に教える主人の教えですが、私は、この伝記を読んで、天理教の会長さんはどうかなと思いました。――お互いに、よふぼくを育てるのに、ここまで行き届いた仕込み方をしているか。自分も、今まで通ってきた道すがらの中で、そういう道を通ってきたかと、いろいろ考えてみます。――お互いに、よふぼくになっていただくように、一生懸命、まだ、お道を聞き分けない段階からおたすけして、別席順序を運び、おさづけを戴いてもらって、よふぼくになったら、「ああ、これで、やれやれ」という感じで、本当はそこからが御用ですが、教会長が、また、道を先に歩む者が、実際に、おたすけに出て、少しからたすけ一条の御用ができるように、後進を、しっかりその気にするところを教えているかと、ふと思いました。

教祖のひながたを見ても、先ずは、ご家族のお子様たちを台にして、教祖ご自身が一緒に通りながら、一つひとつ手引かれる姿。それを、ご家族から、また、周囲に広げていかれる姿。その中に、こうした教祖のお心を、いろいろと汲み取れますが、世間の話しを引き合いに出す必要もなく、教祖のひながたに倣（なら）えば良いわけですが、先を歩む者が、自分で範を示しながら、そして、その意味するところを、ちゃんと言って聞かして、心に収まるまで手引いて指導していくことが大切だと、伝記を読みながら思いました。

飯降伊蔵様の子息・政甚先生を修行に出されるときのおさしづがあります。教祖がお姿をお隠しになられて後、親神様の思召を取り次がれたご本席様の子息なので、おやしきに居たのでは皆が大事に扱うて修行にならない。そこで、現・兵神大教会へ修行に出されるときのお言葉です。

さあく修行々々、学問上十分という、心通して修行。学問上何が違う、彼が違う、どういう事であろう。身上どんと不足なれば、どうする事も出来ん。どんと不足あるとて、さしづ一つで速やか。何年幾年了えたら、身上どんと不足成ったらどうもならん。修行の処、身上不足取次何も案じる事は無い。修行のため、銘々身上磨きに出るのが修行。通さにやなろまい。修行という、心の身を磨きに出るのや。修行、大切に扱うては修行にならん。そら水汲みや、掃除や、門掃きやと、万事心を磨くのが修行。そこでさしてくれるよう。（明23・3・17）

若い人を育て導くために、いろいろ心を尽くしますが、それは、並大抵なことでは、なかなかできるものではなく、年限も掛かるし、根気も要ります。

今、一番、大事なことは、たすけ一条の御用をつとめるよふぼくをしっかり育てること、人材育成の大切さを、仕切って仰っていますが、この笠岡大教会の記念祭に向けても、次の世代に向かって、ひとつ、しっかり、人の丹誠におつとめいただきたい。

▼後継する者と支える者の心構え

私が、会長の理のお許しを戴いたとき、真柱様から、役員同道でのお呼び出しがあり、何故、私が会長になった

のかを問われました。

私は教会本部の役員の家で育ち、教会で生まれ育ったのではありませんが、いんねんあって、高知大教会の島村家へ帰ることになりました。そのとき、真柱様は「島村の家を立てに行け」と仰いました。先代は子供がなかったから、養子に行けということですが、私が会長になるならないは別として、私は島村の家へ養子に入りました。

それから、私が、お道を一生懸命通って、誰よりも信仰的に成人しているのかと言えば、決して、そうではありません。親の出直を受けて、私が会長になったのは30歳で、信仰的にも人生のうえでも、私より経験の豊富な役員さん・会長さん方がたくさんおられる中で、何故、私が会長になったのかという問い掛けです。

このとき、真柱様は、私が「島村を名乗っているから」会長になったと仰いました。

その意味は、何も、私が、役員や部内教会長をおたすけしたわけではありませんが、私に心を寄せることによって、初代会長から連綿と続いてきた歴代会長の思いに報いたいという皆さんの気持ちが、その形になってある。だから、「島村を名乗っている」意味は、そういうことだと仰いました。

僕は、今度、後継される六代会長さんにも同じことを聞き分けてもらいたいのですが、真柱様は、私自身が、「初代からの道を、自分で、一遍、通り直せ。」と、はっきりと仰いました。――歴代会長が歩んでくれた道を、自分でどこまでできるかは分からないが、自らがしっかり通る、そして、自分で道を切り開いていく、自分自身が、直接、同世代の人たちを、育てていくという苦労を、一緒にさせてもらうこと。歴代会長が育てた方は、なるほど、心を寄せてくれて、若い会長を支えてくれるかも知れないが、これからは、次にバトンタッチする、その人材を、本人が、自分が、若い人を育てて、しっかり丹誠すること。だから、実際におたすけさせてもらうこと。――このありがたいお言葉を自分の指針として、私が会長になってから、終生、通っています。

皆さん方も、ひとつ、そういう意味では、後継される若い芯となってつとめられる**方々**に、また、心を寄せていただいて、たすけ一条のうえから、笠岡の若返り、そして、若い人ならではの力と勢いを注ぎ込んで、たすけ一条の御用のうえにつとめていただきたい。

代替わりするということは、そこから、また若い力をもって、飛躍的に発展し、成人した姿をご守護いただくことが、その引き継ぎの意味だと思います。

▼三年千日の心構え

そういうえで、ひとつ、しっかり、理づくりしていただきたい。そのための三年間だと思います。

「百万件のにをいがけ」、あるいは「初席者を一名以上」、それぞれ、ご守護を戴こうと申し合わせておられますが、おさしづに、

どんな処にをい掛かるも神が働くから掛かる。なかくの働き言うまでやない。出るや否や危なき怖わき所でも守護するで通れる。何処其処へにをい掛かりたというは皆神の守護、どんな所通りて危なき所怖わき所でもなかくの理無くば通られやせん。

遁れて来た所、一寸遁れる事出来やせん。

仇の中、敵の中剣の中も連れて通るも同じ事と言う。（明26・7・12）

とあるように、親神様に守られ、また、教祖に先回りして守られながら、一生懸命、にをいがけ・おたすけに掛かる。それは、こうして、神様が、先回りして働かれているからで、私たちは、ただ、一生懸命、まっしぐらにつとめるのみです。

これから3年間、どうぞ、その意味で、しっかり、心定めてお通りいただきたい。

《以上要約》

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていましたので転載いたします。（敬称略）

▼『天理時報』

▽1月20日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡㊎　藤井光子さん

浴びるほど飲みたる酒も大病し
今は一滴も飲まぬ夫なり

▽2月10日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡㊎　藤井光子さん

我が家は白味噌仕立の雑煮なり
金時人参、里芋入れて

▼『陽気』誌2月号「道柳」より転載。

▽秀　詠

・東悠㊎　田林美智子さん

支度出来お願いづとめ待つ夕べ

▽佳　詠

・芦品㊎　金谷眞佐代さん

仕事終えおぢばがえりに出発だ

▼表紙写真

（吉岡輝昭かさおか編集部員）

親里管内学校 受験合宿 実施

笠岡詰所にて

教会長子弟育成委員会
学生担当委員会

教会長子弟育成委員会（森本忠善委員長）と、学生担当委員会（山野弘実委員長）は、2月5日から7日にかけて笠岡詰所で親里管内学校受験合宿を行った。これは、両委員会が共催で、親里管内学校の受験生を世話取りをしているもので、今年は天理高校、教校学園高校の受験生3人（男子1人、女子2人）、スタッフ6人が参加した。

一行は、5日、午前中に大教会を出発。おぢば到着後、試験会場の下見、スタッフによる学習指導（教理勉強も含む）、おてふり練習、面接練習などを行った。受験生達は、本番に向けての準備を整えると共に、同じ笠岡に繋がる者同士の絆を深めた。

なお、3日間のプログラム詳細は次の通り。

2月5日

10時　大教会出発
14時　天理着
15時　神殿参拝後、学校下見
15時30分　詰所到着
17時　オリエンテーション（岡崎塾）
22時　夕食、おつとめ（森本塾）、入浴、就寝

2月6日

6時　起床
6時30分　おつとめ、朝食、片付け、ひのきしん
8時20分　教校へ出発
15時30分　天理高校へ出発
17時　詰所にて面接練習
18時　夕食、片付けひのきしん、おつとめ、お手直し（座りづとめ・よろづよ八首）
22時　就寝

2月7日

6時　起床
6時30分　おつとめ、朝食、片付け、ひのきしん
9時30分　教校面接出発
11時30分　昼食
13時　詰所出発、大教会へ向かう

立教百八十二年 春季大祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中村剛
	田中隆之

講話	島村廣義先生

賛者	杉原博之
	上原浩
指図方	上原繁道

役割／区分	坐り勤	前半	後半
地方	吉岡壽	上原志郎	山野弘実
	三島渉	武内清明	虫明立生
	中村義太郎	内海史郎	三代温生
おつとめ	大教会長様	田中隆之	中村剛
	上原明勇	中島誠治	吉岡誠一郎
	上原繁道	上原浩	横山逸郎
	大教会奥様	岡崎豊子	門脇加津
	田中ますみ	横山小智榮	岡崎和美
	今川佐智子	室悦子	吉岡八恵
てをどり	今川昌彦	淺野明教	上原繁次
笛	内海史郎	赤木素志	渡邉隆夫
ちゃんぽん	笹尾正治	中村道德	田林久嗣
拍子木	田林久嗣	高木昭祥	佐藤真孝
太鼓	佐藤道孝	山田敏教	森本忠善
すりがね	岡崎真一	杉原博之	岡田誠
小鼓	佐藤香苗	内海安子	高木孝子
琴	上原順子	笹尾一美	中村初美
三味線	武内正美	森本冨美子	三島照美
胡弓			

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に　会長上原理一　慎んで申し上げます
親神様には紋型無いところからこの世と人間を御創造下されただけでなく　天然自然のお働きを以て御守護下されお育て下さっております　加えて天保九年十月教祖を月日の社とお定めになり「月日にわにんけんはじめかけたのわ　よふきゆさんがみたいゆへから」とこの世の真実を明かされ陽気ぐらしへのひながたをお示し下さいました　又明治二十年成人を急き込む上から教祖の現身を隠され　ろくぢに踏み均しに出られました事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共は身上や事情を通して親心に触れ　かしものかりもの喜び感謝の心一杯に　親神様教祖のお心に応えるべく　日々はご恩報じを念じてたすけ一条のご用の上に努め励ませて頂いております
その中この月二十六日は教祖が世界だすけの為　扉開いてろくぢに踏み均しに出られた尊い日柄に当たり　おぢばでは春の大祭が執り行われますので　当教会に於きましても理のお許しを戴いて　本日只今からおつとめ奉仕人一同　明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます　御前には遠近を問わず又折からの寒さも厭いませず　今日の日を待ちわびて寄り集いましたよふぼく信者一同　共にお歌を唱和し　日頃のご高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして　親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて本日は世話人島村廣義先生に御参拝頂いております　後程お話を聞かせて頂き　しっかりとおぢばの理を受け止めてそれに応えさせて頂くべく実働に邁進させて頂く所存でございます
又今年から　立教百八十四年十月二十四日の大教会創立百三十周年記念祭並びに六代会長就任奉告祭を目指して三年千日と仕切って成人の歩みを進めさせて頂きます　昨年世上にもお道の上にもお見せ頂いた事情の上から　おたすけ人を育てるのが急務である事を悟らせて頂きましたので　全人類をおたすけ人にすべく「陽気ぐらしを目指して　たすけの輪を広げよう」をスローガンに掲げ　一人一人のたすけ心を一人でも多くの人に映して行くべく　一年目の活動目標を「一教会初席者一名以上そして百万件のにをいがけ」と定め「今一手一つに一歩一歩」の心でおたすけに邁進させて頂く覚悟でございます
何卒親神様には　真実の親心を受け止め　陽気ぐらしを目指してたすけ一条に励む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけを通してたすけ心が次から次へと人に映り　お望み下さる陽気ぐずくめの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を　一同と共に慎んでお願い申し上げます

大教会だより

◎教人資格講習会前期修了者

立教182年1月31日終講
東水島　國末サラ

先日、庭の掃除をしていると「大根はいらんかな？」と近所の方が声をかけてくださった。
喜んで畑に行くと「全部うがしてしまおうと思ようるから、小せえけど好きなだけ抜いたらええよ」とのこと。
お言葉に甘えてたくさんいただき、干したり、煮たり、漬物にしたりして味わい、漬け物をいくらか差し上げた。
数日後、道でお会いしたら「美味しかったわ～。ありがとう」と言われたので「大根がええからですよ」と応えると、
「いやいや奥さんの腕がええからじゃ」とほめ合いになった。ほっこりとして気持ちの良い朝だった。（か）

笠岡大教会
KASAOKA
DAIKYOKAI
130th
Anniversary
創立百三十周年記念祭
六代会長就任奉告祭
三年千日活動
KASAOKA
陽気ぐらしを目指して、
たすけの輪を広げよう
今 一手一つに、一歩一歩！
立教184年（2021年）10月24日 執行